

# 2023年度 2Q決算 決算説明資料

2023年11月2日



エイチ・ツー・オー リテイリング株式会社

### ■ 2023年度 上期（4-9月）実績

〈連結〉

- 売上は8月予想通りに進捗、百貨店業績が予想を上回り、営業利益・経常利益ともに上期で最高益
- 1Q同様、百貨店を含む全てのセグメントが増益

〈セグメント別〉

- 百貨店事業 外部環境の好影響継続により国内売上、インバウンド売上ともに2018年上期実績を上回る  
2Q（7-9月）はインバウンド売上の伸長が加速  
販管費は売上連動経費が増加するも対予想では抑制
- 食品事業 点単価の上昇に客数の回復も寄与し、食品スーパーの既存店売上高は前年超え  
販管費は対前年・予想でも抑制
- 商業施設事業 ホテルが高稼働率を継続し好調に進捗

### ■ 2023年度 通期見通し

- 連結営業利益は中期経営計画目標値を大きく上回る 220億円を見込む
- 10月以降は2Qの外部環境の好影響は前提とせず、下期は当初計画並みを見込む

まずは今回の決算の概要をご説明いたします。

第2四半期実績については、百貨店事業の業績を中心に8月発表予想を上回り、営業利益、経常利益は過去最高となりました。

百貨店事業だけでなく、ほかの事業セグメントもすべて増益となりました。

百貨店事業は、外部環境の好影響が第2四半期でも継続し、国内売上、インバウンド売上ともに2018年度の同期間実績を超えました。

特にこの7月から9月はインバウンド売り上げの伸びが加速いたしました。

経費については、売上連動部分については増加しましたが、経費コントロールの結果、

対予想では抑制し、増益に寄与しました。

食品事業は点単価の上昇と客数の回復の双方が寄与し、食品スーパーの既存店売上高は前年を上回りました。

経費面でも前年、予想の双方に対して抑制を行い、増益に貢献しております。

商業施設事業は、運営するビジネスホテルの高稼働が継続し、好調な進捗となりました。

この結果を受けた、通期の見通しについては、連結の営業利益は今年度を最終年度とする中期経営計画目標値を大幅に上回る 220 億円を見込んでおります。

第 2 四半期までの実績は、外部環境が追い風になっている側面も多くあると考えており、

第 3 四半期以降の見通しにはこの好影響を前提としては織り込まず、下期では概ね期初計画並みと見ております。

I. 2024年3月期 上期実績

II. 2024年3月期 通期見通し

III. 中長期的な成長に向けて

ここからは上期実績、通期見通し、そして中長期的な成長に向けての考え方の順にご説明いたします。

## I. 2024年3月期 上期実績



1. 連結業績
2. セグメント別業績
3. 百貨店事業
4. 食品事業
5. 商業施設事業
6. 特別利益・特別損失
7. 設備投資

上期実績については、ご覧の通りの順番でご説明いたします。

## I - 1. 連結業績



- ▶ 総額売上高は好調な百貨店が牽引し、予想をクリアして進捗
- ▶ 営業利益は百貨店・商業施設事業が予想を上回り、上期として過去最高益

(単位：億円)	1Q	2Q	上期	対前年	対8月予想
総額売上高	2,447	2,605	5,052	109.5%	101.9%
売上高	1,548	1,637	3,185	104.6%	98.9%
営業利益	48	51	99	+88	+29
経常利益	52	55	107	+78	+40
特別利益	7	3	10	—	—
特別損失	4	8	12	—	—
親会社株主に帰属 する四半期純利益	34	29	63	+35	+43

まずは連結業績について、ご説明いたします。

総額売上高は百貨店事業がけん引し、対前年、対予想を上回る進捗となりました。

売上高および経費の面で順調な進捗となったことから、営業利益は 99 億円、経常利益は 107 億円と、上期として過去最高となりました。

四半期純利益についても、前年、予想をともに上回る 63 億円となりました。

## I - 2. セグメント別業績



- ▶百貨店事業 国内売上、インバウンド売上ともに高額商材が牽引し、売上は予想を上回る進捗  
好調な売上と継続的なコストコントロールにより、営業利益は上期で過去最高益
- ▶食品事業 7-9月は売上の回復が強まり、予想通りの進捗  
イズミヤ・阪急オアシスの売上回復とオペレーション改革効果による費用減で対前年から大きく増益
- ▶商業施設事業 1Q同様ショッピングセンター店舗の閉店などで減収も、大井開発のビジネスホテル高稼働により増益

	総額売上高			営業利益		
	上期	対前年	対8月予想	上期	対前年	対8月予想
(単位：億円)						
百貨店事業	2,591	117.5%	103.8%	70	+54	+29
食品事業	2,109	102.5%	99.9%	41	+25	▲4
商業施設事業	158	90.3%	88.2%	18	+9	+7
その他事業	193	109.0%	111.5%	13	+29	+14
連結調整				▲44	▲29	▲16
合計	5,052	109.5%	101.9%	99	+88	+29

(単位：億円)	
H2O単体	対前年
営業利益	+24
グループ内 受取配当金 (全額連結消去)	+25

セグメント別の業績についてご説明いたします。

全てのセグメントが増益となりました。対前年では百貨店事業、食品事業がけん引しました。

百貨店事業は国内売上、インバウンド売上ともに高額商材がけん引し、売上高は予想比103.8%となりました。継続的なコストコントロールも寄与し、百貨店事業としての営業利益も過去最高となりました。

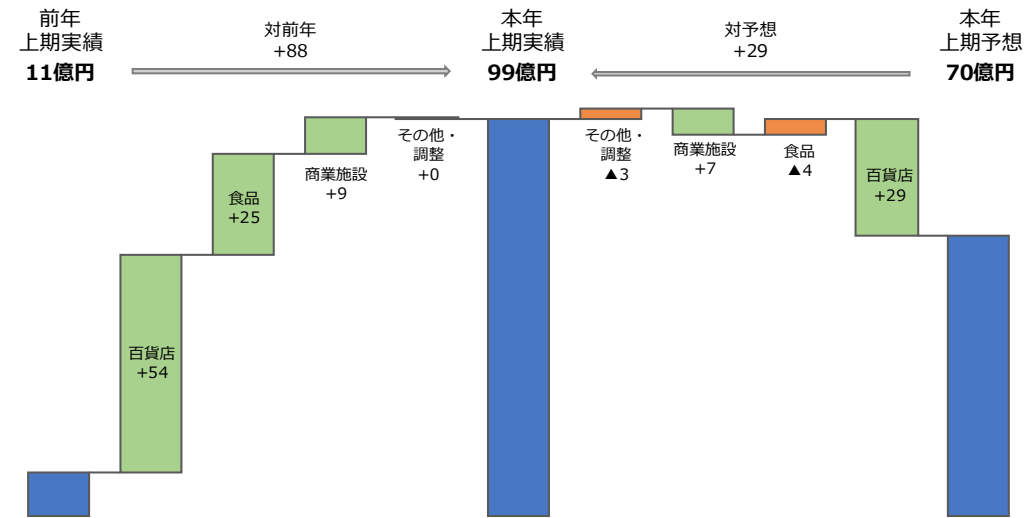
食品事業は7月から9月の売上回復が強くなりました。特にイズミヤ・阪急オアシスの増益が寄与し、対前年で25億円の増益となりました。

商業施設事業は大井開発が運営するビジネスホテルの高稼働が継続し、増益となり、予想も大きく上回りました。

## I - 2. セグメント別業績



### ■ 営業利益増減要因 (対前年、対予想)



セグメント別の業績をグラフで示したものがこちらです。

左からは対前年の増減要因、右からは対予想の増減要因を示しています。

対前年では百貨店事業と食品事業が大きく貢献をしております。

予想に対しては、百貨店事業と商業施設事業が貢献し、予想を大きく上回りました。



## I - 3. 百貨店事業－業績概要



- ▶ 堅調な国内売上とインバウンドが急伸した都心店が売上を牽引
- ▶ 人件費や売上連動経費など販管費は増加も対予想では抑制、営業利益は8月予想を超えて進捗、売上、営業利益ともに上期で過去最高

### 阪急阪神百貨店

(単位：億円)	1Q	2Q	上期	対前年	対8月予想
総額売上高	1,227	1,348	2,575	117.5%	103.2%
売上総利益	276	298	574	+82	—
総利益率	22.49%	22.12%	22.29%	▲0.14pt	—
その他収入	10	10	20	+4	+1
販管費	253	271	524	+32	
営業利益	33	37	70	+54	+28

店別売上	対前年	対予想
都心店	119%	105%
阪急本店	119%	107%
阪神梅田本店	122%	96%
博多阪急	125%	106%
郊外店	116%	101%

(単位：億円)	
販管費増減内訳	対前年
人件費増	+11
家賃・減価償却 (阪神梅田本店など)	+10
売上連動経費	+9

※収益認識に関する会計基準適用前の数値を記載

百貨店事業についてご説明いたします。

堅調な国内売上とインバウンド売上の急伸により、都心店が牽引し、売上高は前年、予想をともに上回りました。

経費については、人件費や売上連動経費の増加により、前年に対しては 32 億円の増加となったものの、予想よりも抑制しました。

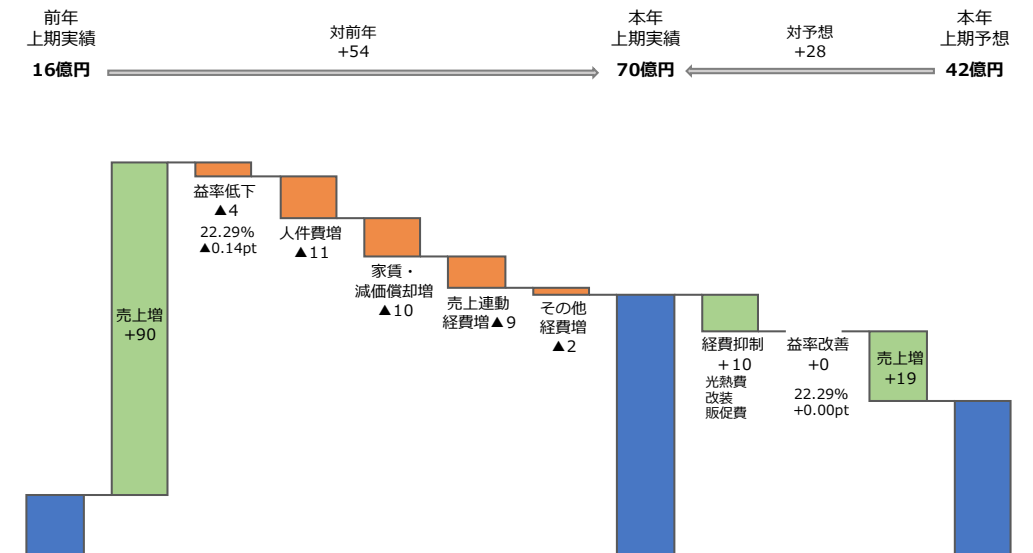
結果として営業利益は前年、予想ともに大きく上回り、売上、営業利益ともに上期で過去最高となりました。

## I - 3. 百貨店事業—利益増減要因



### ■ 阪急阪神百貨店 営業利益増減要因（対前年、対予想）

単位：億円



Copyright © H2O Retailing Corp. All Rights Reserved.

9

こちらのグラフは阪急阪神百貨店の営業利益の増減要因を示したものです。

さきほどのグラフと同じく、左から対前年の増減を、右から対予想の増減を示しています。

前年に対しては、売上増加による粗利の増加が、経費の増加を上回り、大幅な増益となりました。

予想に対しては、売上増加による粗利増加と、経費抑制の双方が寄与し、予想を上回りました。

## I - 3. 百貨店事業—商品別売上



- ▶ 7-9月も全カテゴリーで売上が伸長
- ▶ ジュエリーや時計、バッグを含む身の回り品・雑貨は堅調な国内売上に加えインバウンド売上が大きく押し上げ

### 商品別売上高（全店）

(単位：億円)	上期	対前年	構成比	対前年
衣料品	552	115%	20.6%	▲0.5pt
身の回り品	622	131%	23.3%	2.4pt
家庭用品	70	117%	2.6%	0.0pt
食料品	702	108%	26.3%	▲2.3pt
食堂・喫茶	67	122%	2.5%	0.1pt
雑貨	544	118%	20.3%	0.0pt
サービス	12	138%	0.5%	0.1pt
その他	105	127%	3.9%	0.3pt
合計	2,673	118%		

商品別売上についてご説明いたします。

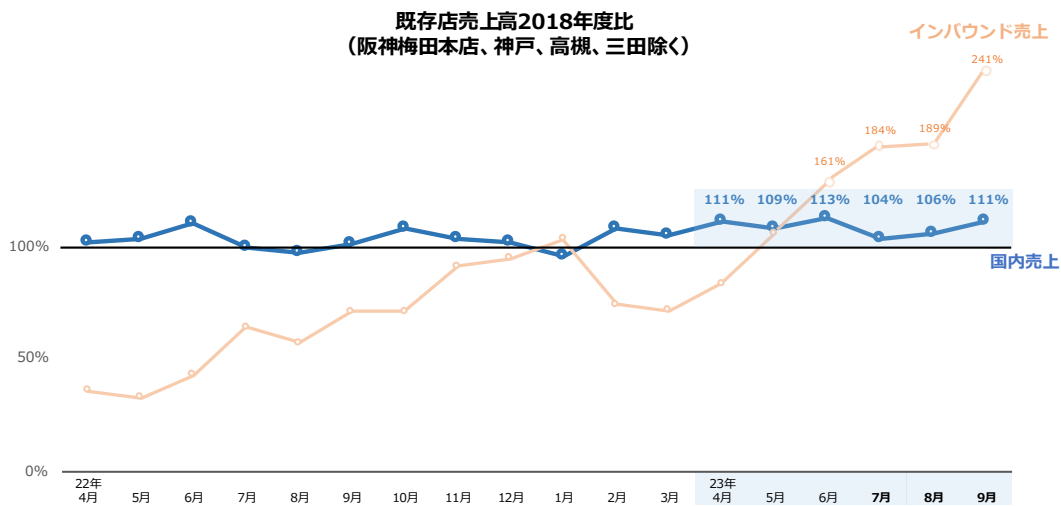
衣料品を含むすべてのカテゴリーが前年を大きく上回りました。

高額商材が含まれる身の回り品や雑貨は、堅調な国内売上に加えて、急伸したインバウンド売上が貢献しています。

### I - 3. 百貨店事業—既存店売上高推移（2018年度対比）



- ▶ 1Q同様、2Q期間も国内売上、インバウンド売上ともに2018年実績を超過して進捗  
国内売上は堅調な高額商材に加え衣料品含め全カテゴリーが回復
- ▶ インバウンド売上は6月以降、単月での最高売上を更新し続けており、為替効果・高額商材ニーズの伸長が継続  
高額商材に強みのある阪急本店は2018年比で6割増と高水準で進捗



Copyright © H2O Retailing Corp. All Rights Reserved.

11

こちらのグラフは既存店売上の2018年度対比を国内売上、インバウンド売上に分けて示しております。

振れ幅が大きなインバウンド売上が目立ちますが、まず国内売上が今年度、安定して2018年度実績を超える水準で推移していることをご覧ください。

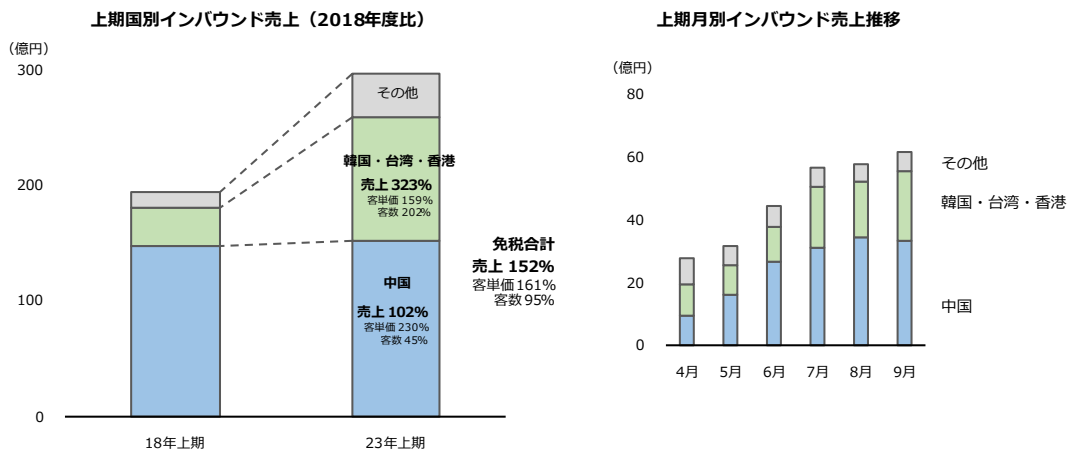
さきほどのカテゴリー別売上でもご説明したように、高額商材だけでなく衣料品等のカテゴリーも回復しており、安定的な力強さがあると認識しています。

他方で、インバウンド売上は、急速な伸長を見せており、6月以降、単月での最高売上を更新し続けています。こちらについては次のスライドでご説明いたします。

## I - 3. 百貨店事業—インバウンド売上推移



- ▶ インバウンド売上は為替効果もあり引き続き高額商材が牽引し、7-9月は2018年度の2倍と好調を継続  
中国売上の回復に加え、韓国・台湾・香港の売上が2018年から大きく伸長  
なお、上期インバウンド売上（300億円）は2022年の年間売上（270億円）を超過し、過去最高売上
- ▶ 客数は中国が5割未満の一方で全体ではほぼ2018年実績まで回復、高額商材の伸長により客単価は大幅に上昇



インバウンド売上についてももう少し詳しくご説明いたします。

インバウンド売上は円安であったこともあり、高額商材が牽引し、7月から9月は2018年度対比約2倍となりました。

中国の回復に加えて、韓国・台湾・香港の18年度を大きく上回る売り上げが寄与し、上期では過去最高となる300億円の水準となりました。

中国は客数が18年度の半分程度にとどまっておりますが、それを上回る客単価の上昇によって、18年度実績並みとなりました。

他方で、韓国・台湾・香港は、客数増加だけでなく、高額商材の伸長により客単価も大きく伸び、18年度実績に対して3倍の水準となりました。

## I - 4. 食品事業一業績概要



- ▶ 食品スーパーは客単価上昇に加え、客数が前年を上回り既存店売上高は1Qから回復ペースを強めるなど前年10月からの値上げが徐々に浸透。3Q以降の点単価の上昇ペースは緩やかになるもの高止まりを見込む
- ▶ イズミヤ・阪急オアシスの粗利益の改善と過去2年間のオペレーション改革の効果によるコストコントロールで大幅に増益
- ▶ 関西スーパーマーケットも着実な施策推進で増収増益
- ▶ 阪急キッチンエール関西は新センター稼働と会員システム変更による影響から減収減益

(単位: 億円)	売上高			営業利益			既存店 売上高 (対前年)	客数 客単価	
	上期	対前年	対8月 予想	上期	対前年	対8月 予想			
食品スーパー計	1,880	102.9%	99.4%	49	+29	▲1	104.2%	100.7%	103.2%
イズミヤ・ 阪急オアシス	1,229	102.5%	98.2%	28	+20	▲5	104.0%	101.0%	103.0%
関西スーパー マーケット	651	103.6%	101.7%	20	+9	+5	104.6%	100.0%	104.5%
食品製造計	162	95.8%	—	▲0	+1	—			
阪急キッチン エール関西	32	88.0%	—	▲4	▲4	—			

食品事業の業績についてご説明いたします。

イズミヤ・阪急オアシスと、関西スーパーマーケットの食品スーパー2社は、既存店売上高が前年を上回り、増収増益となりました。昨年10月からの値上げが徐々に浸透し、2Qの既存店売上高は1Qよりも回復ペースが強まりました。10月以降は値上げが一巡することから、点単価上昇ペースは緩やかになると見込んでいます。

イズミヤ・阪急オアシスは売上伸長とコストコントロールの双方が寄与し、20億円の増益となりました。

関西スーパーマーケットは既存店売上の伸長が寄与し、9億円の増益となりました。

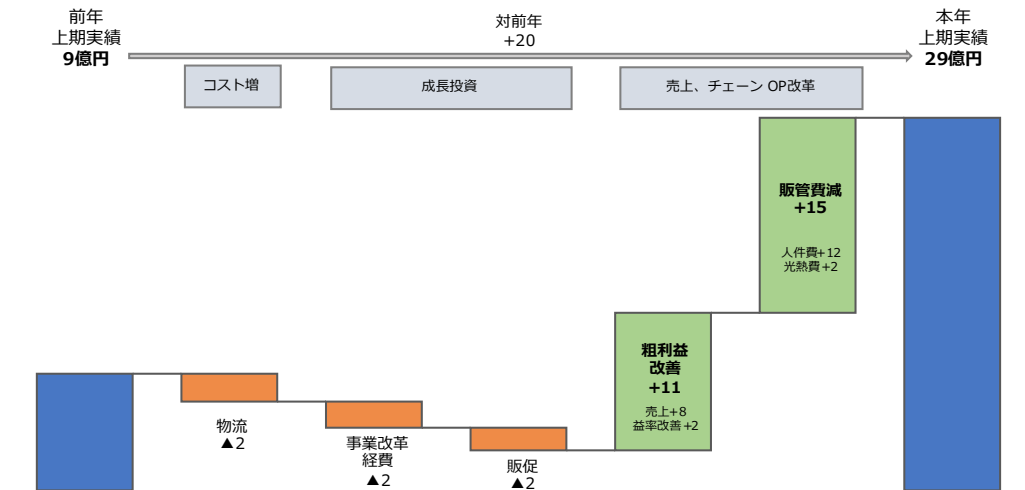
宅配事業を担う阪急キッチンエール関西は新センター稼働と会員システム変更が影響し、減収減益となりました。

## I - 4. 食品事業—イズミヤ・阪急オアシス利益増減要因



- ▶ コストブッシュ要因に対し、粗利益改善とチェーンオペレーション改革による販管費削減で大幅に増益
- ▶ 3Q以降は継続した販管費削減に加え、効果的な費用投入による売上の伸長を図る

### イズミヤ・阪急オアシスの営業利益増減要因（対前年）



Copyright © H2O Retailing Corp. All Rights Reserved.

14

食品事業の中で特に増益幅の大きなイズミヤ・阪急オアシスの営業利益の増加要因についてご説明いたします。

売上・粗利率の改善による粗利益の増加と、チェーンオペレーション改革による経費削減がコスト増加を上回り、前年に対して 20 億円の増益となりました。

チェーンオペレーション改革の効果は今期、上期に集中して出る計画としておりましたが、改革の効果がおおむね想定通り、実績として出ております。

## I - 5. 商業施設事業



- ▶ 大井開発が運営するビジネスホテルの稼働率が7-9月も引き続き9割を超えて推移  
ダイナミックプライシングで高稼働率を維持しながら平均客室単価をアップ、  
自社サイト・予約システムのリニューアルや効率運営の取り組みの効果もあり、過去最高益ペースで推移

(単位: 億円)	売上高			営業利益		
	上期	対前年	対8月予想	上期	対前年	対8月予想
大井開発	30	172.1%	—	13	+10	—
その他 子会社計	129	81.4%	—	5	▲0	—
商業施設事業	158	90.3%	88.2%	18	+9	+7

商業施設事業についてご説明いたします。

大井開発が運営するビジネスホテルが1Qに続いて、2Qでも高稼働で推移し、ダイナミックプライシングによる客室単価向上も寄与しました。

効率運営の取り組みも寄与し、大井開発は過去最高益ペースで推移しています。



## I - 6. 特別利益・特別損失



- ▶ 前年閉店店舗の固定資産売却益を計上

	主な項目	金額	主な内容
単位：億円			
特別利益	固定資産売却益	10	H2O商業開発 (旧イズミヤ大久保店)
特別損失	固定資産除却損	8	阪急阪神百貨店 (阪急本店、神戸阪急、高槻阪急)
	事務所移転費用	3	食品事業本社集約
	店舗等閉鎖損失	1	

特別利益・特別損失については、こちらの表のとおりです。第2四半期までで、目立った大きな項目は発生していません。

## I - 7. 設備投資



- ▶ 業績回復や資産売却を通じて創出した資金により、IT基盤整備や成長に向けた先行投資を継続
- ▶ 店舗・営業施設…神戸阪急リモデル、阪急本店改装、スーパーマーケット店舗改装
- ▶ IT・DX投資…グループのシステム基盤構築

単位：億円	金額	主な内容
百貨店事業	44	神戸阪急リモデル、高槻阪急リモデル 阪急本店GREEN AGE・改装
食品事業	38	スーパーマーケット店舗改装・修繕 宅配事業新センター
商業施設事業	10	H2O商業開発 ショッピングセンター改装
その他事業	77	食品事業本社集約 MD・基幹システム刷新（食品事業） POS再構築（百貨店事業）
合計	168	

設備投資実績についてご説明いたします。

通期見通しに対して、プロジェクトごとに多少の進捗の違いはあるものの、おおむね想

定通り推移しております。

## Ⅱ. 2024年3月期 通期見通し



- ▶ 2Qの外部環境の好影響は前提とせず、下期は当初計画並みを見込む
- ▶ 百貨店事業を中心に各セグメントで業績改善が進み、中期経営計画の営業利益目標を大きく上回る見通し
- ▶ 順調な業績回復に伴い、期末の特別配当3円を計画。通期で28円を見込む

(単位：億円)	上期			下期		通期		
	実績	対前年	8月 予想差	予想	対前年	修正予想	対前年	対中期 計画
総額売上高	5,052	109.5%	101.9%	5,448	105.1%	10,500	107.2%	112.9%
売上高	3,185	104.6%	98.9%	3,615	111.7%	6,800	108.3%	—
営業利益	99	+88	+29	121	+18	220	+106	+50
経常利益	107	+78	+40	118	+17	225	+95	+85
親会社株主に帰属 する当期純利益	63	+35	+43	67	▲69	130	▲34	—

今期の見通しについてご説明いたします。

第2四半期までの外部環境は業績伸長に大きく寄与しましたが、第3四半期以降、この好影響は前提と考えず、下期は期初計画並みを見込んでおります。

営業利益は、対前年での大きな伸長に加えて、中計経営計画の170億円を大きく上回る220億円を見込んでおります。

また、順調な業績回復に伴い、期末には特別配当3円を計画しております。これにより、通期で28円の配当を見込んでおります。

## Ⅱ. 2024年3月期 通期見通し



- ▶ 営業利益は全てのセグメントで対前年、中期経営計画目標を上回る見通し
- ▶ 百貨店事業は2018年度並みの営業利益を見込む

(単位：億円)	総売上高		営業利益		
	通期予想	対前年	通期予想	対前年	対中期計画
百貨店事業	5,553	112.9%	175	+72	+40
食品事業	4,218	101.4%	80	+25	+18
商業施設事業	349	98.1%	30	+12	+12
その他事業	380	105.1%	▲2	+29	+18
連結調整			▲63	▲32	▲38
合計	10,500	107.2%	220	+106	+50

セグメント別の業績見通しについてご説明いたします。

全てのセグメントが対前年、対中期経営計画目標の双方を上回る見通しとなっております。

特に百貨店事業については、前年に対して72億円の増益、中期経営計画目標値を40億円上回ると想定しており、2018年度並みの利益水準に達する見込みです。

## Ⅱ. 2024年3月期 通期見通し—設備投資



- ▶ 中期経営計画に則り、優先順位の高いプロジェクトへ積極投資  
3か年の投資総額は913億円（当初計画950億円）

単位：億円	金額	主な内容
百貨店事業	88	神戸阪急りモデル、高槻阪急りモデル 阪急本店GREEN AGE新設・改装
食品事業	82	スーパーマーケット店舗改造・修繕 宅配事業新センター
商業施設事業	21	H2O商業開発 ショッピングセンター改装・設備更新 大井開発 ビジネスホテル修繕
その他事業	158	食品事業本社集約 MD・基幹システム刷新（食品事業） POS再構築（百貨店事業）
合計	349	

設備投資額の通期見通しについてはこちらのスライドの通りです。

期初計画からの変更はなく、中期経営計画3か年の投資総額は当初計画950億円の枠

内に収まる913億円を見込んでおります。

決算実績および通期見通しについては以上です。